

宮作便り 第38号

平成23年9月30日発行



自分の始末

社長 宮本 慶太

今回は、曾野綾子氏が書かれた『自分の始末』から面白いところを抜き出しました。

人生を楽しく畳む知恵

自分の精神がどれだけ老化しているかを量るには、どれくらいの頻度で「くれない」という言葉を発するかを調べてみるといい。友だちが・・・配偶者が・・・政府が・・・ケースワーカーが「してくれない」・・・この精神的老化は、実年齢と殆ど関係がない。

昔の人生では不幸が原型だったが、今は幸福で当たり前になったのである。当然のことだが、今も貧乏、病気、不運はある。昔不幸な人は「人生はこんなものだろう」と考えて黙って耐えていたが、人間は幸福で当たり前、「安心して生きられる」社会を、政治家も役人もこぞって標榜するようになると、些かの不幸がある人は大きな声でその不備を政府だか社会に対しなじるようになる。不幸は沈黙しているが、幸福への飽くなき欲求と権利の追求は、饒舌なのである。

私が・・・全ての生徒に対して一定の時期に奉仕活動をさせるべきだと提言したら「自発性のないものは教育的でない」とか「個性重視の教育と反対方向だ」・・・と反論がありました。

しかし、教育はすべて強制から始まるものです。

昔は、権利があってもしないというのが美德だった。「遠慮」というすてきな言葉があったでしょう。「才覚」・・・何をするにも「いちいち他人に聞かないで、どうしたらうまくできるか自分で考えろ。知恵を働かせなさい」でしたから。つまり年を重ねたら、重ねただけ才覚にあふれた老人がたくさんいたわけです。・・・年をとってもなお、・・・自立するためには、知恵を働かせ残された機能を使い続けるよりしょうがない。



釣り

サービス課 三野原 政信

小学生の頃よく親父とキスやハゼを釣りに行った。ここ4〜5年位前から、子供たちと一緒に年1〜2回位ハゼ釣りにいっている。今年は親父と息子と私と3世代で、キス釣り3回・ハゼ釣り1回行って来た。

早朝4時に起きて瀬波海岸に直行。3世代思い思いの場所です。釣り竿に仕掛けをつけて釣りを開始。親父はワンカッブを片手に釣りを始める。息子が仕掛けを投げてすぐに釣れた」と言っていてリールを巻く。仕掛けを投げてすぐなので釣れていないかといえ、なぜか釣れている。俺が一番最初に釣った」と自慢げに釣れた魚を見せる。その態度が憎たらしい。そんなこんなで3〜4時間位、朝の清々しさと波の音、山の緑と海と空の青さに囲まれて、のんびりした時間を過ごして行く。釣果はいまいちでも気持ちよく帰って来れる。連れて来た魚は夜、親父殿がテン普拉にしてくれて、家族みんなで食べる。もちろん親父と私は酒のつまみにして食す。最高に旨い。

酒の肴を釣りいく目的もあるが、朝早くに海に向かって釣り糸を垂らしながらボーとしているのも、なんともいえず気持ちのいいものである。

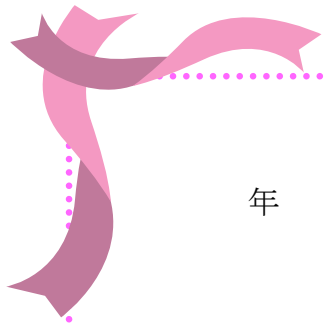


運動会

石油部業務 飯沼崇志

先日、息子が通う保育園の運動会がありました。四月に入園したのですが保育園での様子を今まで見たことがなく色々心配でしたが、家に居る時と違っておとなしい感じでしたが、皆と一緒に楽しそうにダンスをしたり、一生懸命かけっこや障害物レースをする息子の姿を見て、少しずただけ成長しているなと嬉しく思いました。私は親子レースと、保護者リレーに参加したのですが、日頃の運動不足が祟ってか、気持ちに体がついてこず散々な結果でした。とても疲れたけど親子三人楽しく過ごせた一日でした。





年

平
年 年月

年 月(月 日) 日
成

日

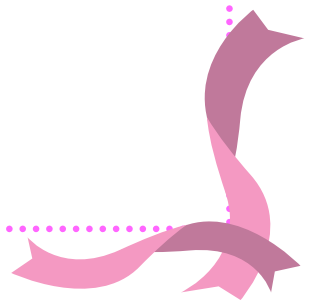
日

日

日

日

年



月 日

